

資料紹介

外交官交遊録としての中国近代絵画

—— 京都国立博物館須磨コレクションにある徐悲鴻の三作品について ——

呉 孟 晋

KURE Motoyuki

はじめに

昭和初期から第二次世界大戦期にかけて、南京総領事やスペイン特命全権公使を歴任した須磨弥吉郎（1892-1970、号は昇龍山人、梅花草堂主人、禾堂）は、情報収集に長けた第一線の外交官であると同時に、美術を愛好するコレクターでもあった。須磨が任地の中国で1927年（中華民国16、昭和2）から11年間にわたり収集し、子息の末千秋氏らにより京都国立博物館（以下、「京博」と略記）に寄贈された京博須磨コレクションは、総数約1,200点にのぼり、齊白石（1864-1957）や徐悲鴻（1895-1953）の優品をはじめとする中国近代絵画の一大コレクションとして知られている。だが、このコレクション最大の特徴は、こうした美術史的な価値のみにとどまらない。つまり、須磨本人が美術鑑賞という趣味と外交官としての実益を兼ねて作品を収集したゆえ、20世紀前半の日中近代史のアーカイヴとしての側面も有していることにある。

たとえば、1931年に須磨が広東国民政府主席の汪兆銘や嶺南派の画家の高奇峰らから贈られた通称「須磨帖」は、広東領事であった須磨が汪を筆頭とする反蔣介石派の糾合に関わり、「日支同盟」案を画策していた頃の寄せ書き帖である。「須磨帖」のように、須磨コレクションの書画作品は「美術作品」とであると同時に、当時の中国政財界の要人や文化人たちとの交流を傍証する「図像資料」でもあるといえる。

本稿では、京博須磨コレクションを紹介するにあたり、コレクションのなかから南京国民政府を中心とする当時の中国政界との交流をうかがわせる、1934年から35年にかけての徐悲鴻作品3点を取りあげたい。1934年冬に徐悲鴻が須磨弥吉郎のために描いた

「松鶴図」と、34年夏に描かれ、須磨が作品入手の感慨を語った「快馬一朝鳴図」、そして35年春に徐が「喜鵲図」を加えた須磨宛ての寄せ書き帖「雲濤帖」⁽²⁾である。これらは、当時の中国画壇を代表する人気画家の作品として審美的な次元で鑑賞された一方で、政治外交や社交の場で交渉を円滑に進める「小道具」にもなった。いわば、「外交官の交遊録」とでもいうべき須磨愛蔵の3作品をとおして、須磨コレクションがもつ「図像資料」としての多義的な価値を確認しておきたい。

1 「松鶴図」について

本図は、近代中国を代表する洋画家の徐悲鴻が、水墨で松に留まる鶴を描いた作品である（図1）。紙本墨画淡彩で、本紙の法量は縦131.8センチメートル、横63.7センチメートル。

徐悲鴻は幼名を寿康といい、江蘇宜興の出身。中学美術教師などを経て、上海で康有為や王国維を知り、1917年に日本に遊学、18年には蔡元培の招きで北京大学画法研究会講師に就いた。蔡の推薦による欧州への官費留学は19年から



図1 徐悲鴻筆「松鶴図」（1934年、京都国立博物館蔵）

9年間におよび、パリのアカデミー・ジュリアンを振り出しに国立美術学校ではフラマン教室にて学んだ。ドイツではベルリン美術院院長カンパに師事。27年に帰国後は、上海で田漢、歐陽予倩と南国芸術学院を創設。北平大学芸術学院院長を経て、29年に中央大学芸術系教授として南京転居後は、首都南京の画壇を主導して後進の育成につとめた。写実主義にもとづくアカデミズムを本領とし、デッサンを重視した絵画制作と教育は、人民共和国での社会主義リアリズム隆盛の端緒を切り開いた。

「松鶴図」の題識と印章は、次のように読める（「／」は改行を示す）。

雲表藏蹤跡，蒼然冰雪姿，清風明月夜，一唳動人思，
／須磨先生雅教，甲戌晚秋，悲鴻倦遊歸來，
「悲鴻」（朱文方印），「東海王孫」（白文方印）
（遊印）「吞吐大荒」（白文方印）
（鑑藏印）「須磨弥吉郎印」（白文方印）

題識の2行目にある「須磨先生雅教」は、須磨弥吉郎への為書きであり、制作時期を示す年紀の「甲戌」は1934年（民国23）のこと。「甲戌の晩秋，悲鴻，遊に倦みて歸來す」とあり、徐悲鴻が34年11月に浙江省の天目山への写生旅行から帰ってから制作したことを意味する。このとき、徐は南京の中央大学芸術系主任教授の職にあり、10月22日から11月2日まで、同大の芸術系絵画組3年の学生10余人と課外旅行に出かけていた。⁽³⁾

この図は、油彩画を専門にしていた徐悲鴻が須磨のために水墨で松に鶴という吉祥の画題を描いたという点で、他作とは異なる特徴がある。

美術作品として、この図は丹頂鶴のまなざしに徐の鳥獣の画に共通する愛くるしさが見てとれ、秀作であることは疑う余地もない。しかし、月夜に佇む鶴にちなんだ五言絶句の題詩は、1929年制作の松鶴図と同じである。⁽⁴⁾つまり、徐は芸術家としての創作意欲をたぎらせて本図を描いたというよりは、定型化した図様と詩句を用いて贈答画を手早く仕上げたということになる。

事実、鶴が宿る松樹の幹は樹皮を表す墨線が単調

で、幹のうねりもやや生気に欠ける。同じ徐悲鴻の松の図でも、須磨が入手した「黄山古松図」（1934年）（図2 個人蔵）は高くそびえ立つ1本の松樹を水墨のにじみを効果的に用いて洋画的な立体感を醸して描き出しており、「松鶴図」のそれとは大きく異なる。「黄山古松図」は前述の天目山への写生旅行による作品であり、両図はほぼ同時期に描かれたとはいえ、徐がどちらに傾注していたかは一目瞭然であろう。

それでも、須磨は本図をいたく気に入っており、1952年（昭和27）出版の『現代美術事典』で分担執筆した「中国現代絵画」の項目で、徐悲鴻の代表作として挿図に採用した。⁽⁵⁾須磨の愛玩ぶりを裏付けるのが、須磨本人による本図についての以下の記述である。

松鶴（IV二二四）

昭和九歳十二月十二日，交通部朱家驊が山人と通信協定を締結し，又た旧交通部借款整理の折衝をなし大体片附きたる機会に，そのファブオリト（favorite）とも観られ居たる悲鴻に山人の上款入りにて描かしめ，之に更に悲鴻の「須磨弥吉郎」の古石図章篆刻を添へて贈附せるものなり。（「文具考」五十八頁第十号）

老松上に孤鶴，四周を瞰睥するの図にして，大作なる上に落着のある名品といふべし。その後，悲鴻，山人宅に来訪の際，本作に談及び，悲鴻の需めに依りて之を示すや，自作に恍惚たるの風を示し居たり。⁽⁶⁾



図2 徐悲鴻筆「黄山古松図」（1934年，個人蔵，『中国近代絵画と日本』展図録より）

須磨は1945年8月の第二次世界大戦の日本敗北をスペインのマドリッドで迎えた。そのまま現地で拘束され、翌46年にA級戦犯として日本に移送されるまでの間、中国とスペインで経験した外交体験と両地で蓄えた膨大な美術品についての記録を約60冊のノートに書き記した。これがいわゆる「須磨ノート」であり、現在は外務省外交史料館に寄贈され、同館の所蔵になっている。

須磨は数々の機密情報を取り扱う外交官の特性として、並外れた記憶力を有しており、美術品については収集の経緯や感懷をノートや表装の裏など各所に書きつけていった。今日、須磨コレクション作品の来歴をつぶさに知ることができるのは、こうしたコレクター本人による詳細な記録のおかげである。

さて、「松鶴図」は、須磨ノート「京滬洋画派」のなかの「徐悲鴻」の項の「動物」の第3番目に著録されている。それによれば、本図は1934年12月に交通部長（大臣に相当）の朱家驊（1893-1963）が須磨との間で「通信協定」を締結したのを記念して、徐悲鴻に制作を依頼した作品であった。つまり、「松鶴図」は須磨にとって外交官として日中間での協定締結に至った業績を思い起こさせる「贈物」であった。

朱家驊は字を驩先といい、浙江吳興（現湖州）の人。近代中国の地質学の発展に寄与した学者にして国民政府で教育部長や交通部長、浙江省主席などを歴任した政治家でもある。上海の同済徳文医学堂で学び、中国同盟会加入後は、上海を拠点に革命に参加。1914年にベルリンに留学して地質学を修め、北京大学教授に就いた。18年には蔡元培の推薦で再度ドイツに渡り、22年ベルリン大学で哲学博士号取得。米国を経て、30年には中央大学校長、40年からは蔡の後任として中央研究院代理院長となった。31年から32年までは教育部長、32年から35年までは交通部長として、中国の教育・社会基盤整備に尽力した。

須磨のいう「通信協定」と「交通部借款」とは、交通部が日本の国策会社の東亜興業などから借り入れた「有線電信拡張借款」のことである。電信網の拡張と改良のため1920年からいわゆる「西原借款」の一部で、須磨が本省に打電した電文など一連の文書がすでに公開されている。⁽⁷⁾ 交通部と日本の外務省そして東亜

興業との協定書は11月1日付で締結されており、そのほかの返済交渉にめどがついたのは12月初旬で、その内容は12月6日付で新聞報道された。⁽⁸⁾ 元本1,022万円に延滞利子を元本と同額とし国民政府の返済額を合計2,044万円に抑えることを骨子とする。『中外商業新報』は、この合意案を「これをモメントとして兎角疎通を欠きがちであつた日支関係を旧の親善関係に引戻す一つのよすがとすることが出来ればその寄与するところは重且大といふべきである」と歓迎した。⁽⁹⁾

須磨ノートには「昭和九歳十二月十二日」の日付が記されているが、「松鶴図」の年紀は「甲戌晩秋」（1934年11月）なので、朱は協定書を取り交わした直後に徐に須磨への礼品制作を依頼したようだ。須磨は本図とともに徐が刻んだ古石図章印「須磨弥吉郎印」を受け取っている。朱家驊と徐悲鴻は、それぞれ政治家と洋画家という立場こそ違えたものの、1920年代の同時期に欧州留学に赴いており、須磨が「ファブオリト（favorite）」と形容したようにベルリンで友情を培った間柄であった。また、徐が勤務する中央大学では、朱が校長をつとめていた。

もちろん、須磨は直接、徐とも親交を結んでいた。須磨ノート引用部後半に、こののちに徐が須磨宅を訪ねた際に「松鶴図」を再見し、「自作に恍惚たるの風を示し居たり」とある。

須磨の趣味は美術品収集だけでなく、ときに自ら筆を執って絵を描くこともあった。須磨はおもに簡略な文人画や水彩スケッチを得意とし、戦後の1961年と64年には画集を出版している。⁽¹⁰⁾ 作品収集の傾向も、緻密に描かれたものよりも文人の気風が感受できる簡潔な作品を好んだ。

須磨をして「老松の上に孤鶴、四周を睥睨するの図」といわしめたこの図は、必ずしも徐の代表作とはいえないものの、須磨の嗜好に合った文人画であった。孤高の雄姿を見せる1羽の鶴に、須磨は外交交渉の難局に立ち向かう自らを重ね合わせていたのではないだろうか。

2 「快馬一朝鳴図」について

ときに、美術品収集をめぐって須磨弥吉郎は中国政



図3 徐悲鴻筆「快馬一朝鳴図」(1934年、
京都国立博物館蔵)

界の要人と競り合うこともあった。徐悲鴻の作品でその逸話をもつのが「快馬一朝鳴図」(1934年)(図3)である。この図は紙本墨画淡彩で、本紙法量は縦77.2センチメートル、横52.5センチメートルの作品。

徐悲鴻の馬は彼の水墨作品のなかでも最も知られた画題であり、収集家のあいだでもとくに人気が高かった。本図には徐の落款がないものの、太筆で素早く大胆にひいた墨線は駿馬の姿態をよく捉えており、馬の鼻筋に掃いた白は画面全体の調子を引き締めている。

本図を一瞥して気がつくのは、本紙を取り囲む2辺に長文の題跋があることである。それは次のように記されている。

快馬／一朝／鳴，「守愚」(朱文方印)，「須磨弥吉郎」(朱文円印)

金陵清／翰齋主人／曰，甲戌夏／日徐悲鴻／先生作此／図於面前，／即与之，而／不落款，／且不語／其故矣，／定於乙亥／二月十五日，／溧陽旅京／同郷会賑／災書画展／并在府東／街青年会／陳列書画／三百余点／中，最佳為／悲鴻先生所作馬之図，但是其馬之勢迥不及此図，二月十六日再訪賑災展，見／林主席購定其図，山人思悵然，且撫然，而欲獲此図，録之，乙亥二月十六日，於金陵，昇龍山人，「昇龍山人」(白文三角印)

(遊印)「樊山手書」(朱文方印)，「撫孤松而盤桓」

(11)
(白文長方印)

この跋文は須磨弥吉郎本人の筆であり、須磨が対抗心を抱いたのが「林主席」こと、国民政府主席の林森(1868-1943)であった。以下の須磨ノート⁽¹²⁾の記述とあわせて、本図取得のいきさつがわかる。

駿馬素描(Ⅳ一九九)

昭和九歳十一月十二日，清翰齋主人，沈曉峯より贈らる。悲鴻自身が袞装の謝礼として沈君に之を贈れりといへり。無落款なるも実に佳作なり。⁽¹²⁾

須磨が語るには、本図は1934年(甲戌・民国23)の夏，金陵(南京の古称)の清翰齋の主人・沈曉峯の面前で徐悲鴻が書画表装の謝礼として描いて与えたものである。翌35年(乙亥・民国24)2月15日，溧陽旅京同郷会(溧陽は江蘇省南部の都市)が開催した賑災書画展(収益を災害義捐金にあてる慈善展覧会のこと)で徐の馬図をみつけた。展示作品のなかでは一番の出来であったので，翌16日にこれを購入しようとしたら，すでに林森に先まわりされてしまった。だが，本図はその馬図よりも出来がいいので，悵然，かつ撫然としつつも，本図を手に入れることができた喜びを記す，と。

コレクターとしての弥吉郎の悔しさと喜びがそのまま伝わってくるかのような一文であり，本図を「快馬一朝鳴」と題した。惜しむらくは，本図右側に水がかり，带状のしみが残ってしまったことである。

林森は字を子超，号を天波といい，福建閩侯の人。国民党右派の西山会議派に属する政治家である。台北電信局や上海海関勤務を経て中国同盟会に加入し，辛亥革命に参加。中華民国建国にあたり参議院議長に就任。孫文を支え，25年の孫文没後は西山会議派に連なった。同年の国民政府成立時には常務委員，32年からは国民政府主席の地位にあった。

須磨ノートによれば，須磨が入手した徐の馬は本図のほかに「千里馬図」と「白馬の図」があった。それでも，本図が須磨にとって愛着のある作品であったことは，「無落款なるも実に佳作なり」との簡潔な評語からもうかがえよう。



図4 齊白石筆「相伴看山図」
(京都国立博物館蔵)

作品獲得に一喜一憂するのはコレクターの性である。たとえ、日ごろの交渉のカウンターパートとして礼を尽くすべき政界の要人であろうと、意中の作品を前にすればライバルにほかならない。須磨は、徐悲鴻の馬を逃したものの、齊白石筆の「相伴看山図」(図4)の場合は15年の歳月をかけて手に入れた。

『梅花草堂目録』(小ノート)の「相伴看山図」の項には、「昭和十九歳(1944), 伯林ライブターガー街, チナ・ボルカンに需む。」「昭和四歳(1929), 燕京に於いて僚友トラウトマン独逸公使に見たてやりたるもの。」

欧京に於いて又梅花草堂に帰す。白石翁は山人に縁深遠なりと云ふべし。」とある。

文中の「トラウトマン」とは、ドイツ大使のオスカー・トラウトマン (Oskar P. Trautmann: 1877-1950) のこと。須磨と並ぶ齊白石コレクターとして知られ、盧溝橋事件後の37年11月から翌38年1月にかけての「トラウトマン工作」と呼ばれる近衛内閣が画策した日中和平交渉で仲介役をつとめた。

3 「雲濤帖」について

須磨弥吉郎と徐悲鴻そして林森の交際を物語る、もうひとつの作品が「雲濤帖」(図5-7)である。「雲濤帖」とは、1934年9月9日、上海の日本料亭・月廬家にて須磨満42歳の誕生日を祝う宴席で揮毫された寄せ書き帖を指す。この祝宴には林森のほか、監察院長の于右任(1879-1964)や徐悲鴻らが臨席し、須磨自作の書画も収められている。

この帖は第六開の徐悲鴻筆「喜鵲図」(図7右頁)と第九開の徐培基筆「岱嶽雄姿図」のみが紙本墨画淡彩で、それ以外は紙本墨画の作。各頁の本紙法量は縦39.2センチメートル、横35.7センチメートルである。

徐悲鴻の「喜鵲図」は、小品ながら彩色を用いて丁寧を描いており、春の到来を告げる鵲の俊敏さを漂わせた姿態をよく捉えている。鵲という画題は徐が得意とするものであり、須磨コレクションにも「喜鵲図」のほかに「梅枝双鳥図」(1931年)(図8)がある。これは鵲のつがい紅梅の枝先に留まって新春を寿ぐ図様であり、「萬先」なる人物に贈られた一幅である。⁽¹³⁾「梅枝双鳥図」の鵲も「喜鵲図」と同曲であり、前節の「松鶴図」に加えて、鵲の図も徐の贈答画の定型で

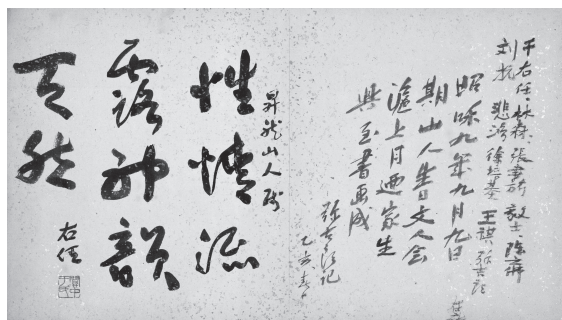


図5 「雲濤帖」帖首、須磨弥吉郎跋(1935年)と于右任題字(1934年、京都国立博物館蔵)



図6 「雲濤帖」第一開、林森筆「墨竹図」と須磨弥吉郎題字(1934年、京都国立博物館蔵)



図7 「雲濤帖」第六開、徐悲鴻筆「喜鵲図」(1935年)と須磨弥吉郎筆「山水図」(1934年、京都国立博物館蔵)

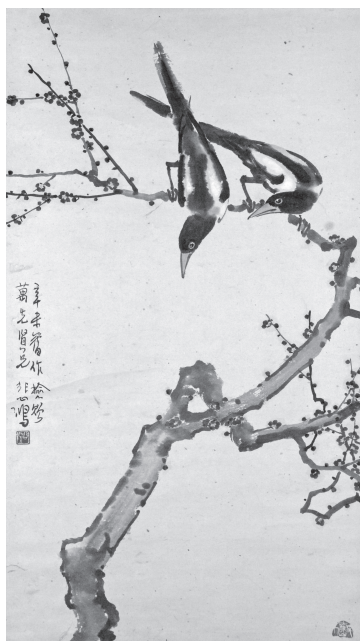


図8 徐悲鴻筆「梅枝双鳥図」(1931年、
京都国立博物館蔵)

あった。

それでは、徐が出席した須磨の誕生会とはどのような会合であったのだろうか。本帖の構成と帖首、帖末に須磨が書きつけた題跋を見てゆくと、おぼろげながらもそのときの状況がうかがえる。各開の構成は次のとおりである。

帖首見開き：須磨弥吉郎跋，于右任題字（図5）

- ・于右任，林森，張書旂，毅士，陳之仏，／劉抗，悲鴻，徐培基，王祺，弥吉郎 集，／昭和九年九月九日，／期山人生日文人会／滬上月廼家，生／興極書画成，／弥吉郎記，／乙亥春日，
- ・昇龍山人属，／性情流／麗，神韻／天然，右任，「関中于氏」（朱文方印）

第一開：林森筆「墨竹図」，須磨弥吉郎題字（図6）

- ・林森，
- ・行不由／徑，／為寿美枝女史生日，／昇龍山人題，「昇龍山人」（白文三角印）（関防印）「（印文不明）」（朱文長方印）

第二開：張書旂筆「菊花小鶏図」，須磨弥吉郎筆「鶴図」

第三開：李毅士筆「樹下人物図」，須磨弥吉郎筆「無量寿仏図」

第四開：陳之仏筆「雀石図」，須磨弥吉郎筆「鳥虫

図」

第五開：劉抗筆「荷花図」，須磨弥吉郎筆「三樹小居図」

第六開：徐悲鴻筆「喜鵲図」，須磨弥吉郎筆「山水図」（図7）

- ・昇龍山人晒正，／乙亥暮春，悲鴻，「悲鴻之印」（白文方印）
- ・春松見行水，／禾堂題，「昇龍山人」（白文三角印）

第七開：汪亜塵筆「金魚図」，須磨弥吉郎筆「陽朔所見図」

第八開：諸聞韻筆「竹石図」，須磨弥吉郎筆「念仏図」

第九開：徐培基筆「岱嶽雄姿図」，須磨弥吉郎筆「南山飛鳥図」

第十開：王祺筆「松鳥図」，須磨弥吉郎題字

帖末見開き：須磨弥吉郎跋三則

本帖の構成は、右頁に宴席への参加者が、左頁に須磨弥吉郎の題画が並んでいる。帖首の見開きに須磨は、上海の日本料亭・月廼家で催された「山人生日文人会」に、于右任，林森，張書旂，李毅士，陳之仏，劉抗，徐悲鴻，徐培基，王祺が出席し，この帖が出来上がったことを記している。于右任と林森の2人以外は皆画家であるが，于は草書の名手として知られ，林は須磨と同じ美術品のコレクターでもあった。須磨は名を挙げていないが，このほか諸聞韻の画がある。

以下，各人の略歴を掲載順に紹介する。

于右任は初名を伯循，字を誘人といい，後に同音の右任に改めた。号は髯翁など。陝西三原の人。中国同盟会に加入し，『神州日報』『民呼日報』『民吁報』『民立報』などを創刊し，革命を鼓吹した。民国後，『民立報』が袁世凱により発禁になると日本に逃れた。31年以降は国民政府で長らく監察院長の地位にあった。復旦大学，上海大学などを創設し，高等教育の確立に貢献。于は政治家であると同時に書家としても著名であり，「標準草書」を制定し「当代草聖」と称された。

張書旂（1900-1957）は鳩の画を得意とし，徐悲鴻と柳亜子とともに「金陵三傑」と並称された国画家。李毅士（1886-1942）は英国に留学した洋画家で，歴

史絵画を得意とした。陳之仏（1886-1962）は東京美術学校図案科に留学し、帰国後は『東方雑誌』や『小説月報』など民国期を代表する雑誌や書籍の装幀を数多く手がけた。工筆花鳥画でも知られた。劉抗（1911-2004）は、華僑の洋画家で劉海粟の高弟。戦後シンガポール画壇の発展に貢献した。

徐悲鴻の画をはさんで、汪亜塵（1883-1983）は東京美術学校西洋画科に留学した画家で、洋画のほかに墨彩の花鳥や金魚を得意とした。諸聞韻（1895-1939）は呉昌碩の外甥にあたる国画家。徐培基（1909-1970）は上海芸術専科学校国画系で学んだ若手の国画家である。最後の王祺（1890-1937）は立法委員や国民党中央執行委員を歴任した政治家。名は淮君、号は醴散居士など。政務の合間に画筆を握り、1937年（民国26）、中国の官展にあたる第二次全国美術展覧会では準備委員をつとめた。

以上、于右任と王祺をのぞく7人の略歴から、この宴席には上海で徐悲鴻につながる画家たちの多くが参集したことがわかる。南京の中央大学にいたのは張書旂、李毅士、陳之仏、諸聞韻らで、徐が創設に関わった上海の新華芸術専科学校には、汪亜塵や徐培基らがいた。おそらくは、徐が須磨のために知己の各人に呼びかけたことであろう。

もっとも、本帖は9月9日の座の余興として、その場の参加者によって一気呵成に描かれたものではない。本帖各所に書き込まれた年紀を時系列順に整理してみると次のようになる。

- ・癸酉（1933）秋日〔第十開左頁〕：第一開（須磨弥吉郎題字）から第十開（須磨弥吉郎題字）までの左頁
- ・昭和九年（1934）九月九日〔帖首右頁〕：帖首見開き（于右任題字）、第一開（林森筆「墨竹図」）から第五開（劉抗筆「荷花図」）までの右頁
- ・乙亥（1935）春日〔帖首右頁、第六、七、九、十開右頁〕：帖首見開き（須磨弥吉郎跋）、第六開（徐悲鴻筆「喜鵲図」）から第十開（王祺筆「松鳥図」）までの右頁
- ・乙巳（1965）首月〔帖末右頁〕：帖末見開き（須磨弥吉郎跋）

- ・丙午（1966）元旦〔帖末左頁〕：題箋（須磨弥吉郎題字）、帖末見開き（須磨弥吉郎跋）
- ・丁未（1967）五月念九〔帖末左頁〕：帖末見開き（須磨弥吉郎跋）

すなわち、本帖は1934年9月9日当日にすべて書きあがったのではなく、1933年秋から34年9月9日をはさんで35年春にかけて、3つの段階を経て完成したことがわかる。

まず、1933年秋に須磨が「寿美枝女史」なる人物の誕生日に10頁からなる書画を揮毫して「寿美枝女史」に贈った。通常、書画帖は見開きの左頁に作品を配する場合が多く、須磨の書画は左頁にある。だが、本帖は34年9月までにふたたび須磨の手許に戻り、于右任、林森、張書旂、李毅士、陳之仏、劉抗が9月9日に右頁に筆を加えた。これらの作品が墨画であり、印章を欠いた簡単な席画であるのはそのためである。そして35年春に徐悲鴻、汪亜塵、徐培基、諸聞韻、王祺が再度、右頁に画を加えた。徐悲鴻や徐培基の作が淡彩であるのはおそらく時間をかけて作画したためであろう。

本帖のような席画は、前述の「須磨帖」のほか、洋画家の劉海粟と王濟遠それぞれの筆による「昇龍山人劍舞図」（1933年）（図9、図版は劉海粟の幅）があ



図9 劉海粟筆「昇龍山人劍舞図」（1933年、京都国立博物館蔵）

る。須磨は日ごろの鍛錬の成果として、しばしば剣舞を披露していたが、須磨本人は妻との誓いにより、酒を口にすることはなかったという。

戦後、東京に戻った須磨は、折に触れてこの画帖を開いては跋文を記しており、帖末には「乙巳（1965）首月」、「丙午（1966）元旦」そして「丁未（1967）五月念九（5月29日）」の年紀をもつ3則がある。

この会合の日付の「昭和九年九月九日」とは、重陽の節句にあたり、縁起の良い陽数の「九」が3つ並ぶという長命を祈念するにふさわしい時機であった。須磨は、1967年の跋文に「観旧練夢」と書いて外交官時代を懐旧した。そして、その3年後の1970年に77歳の天寿を全うしたのである。

おわりに

須磨弥吉郎は、須磨ノートのなかで徐悲鴻を評して、次のように記している。

劉海粟・王濟遠と支那洋画界に鼎立し、南京中央大学の腕利きとして肩で風を切つて歩いてゐるハイカラな、又た事実相当スマートな存在が徐悲鴻である。（「草堂洋画」九九頁）……（中略）……国民革命・三民主義、首都南京時代には新生活運動のホープでもあるやうに横行濶歩し、汪精衛・朱家驊（当初文相にして後に交通部長となる）等の要路に出入し、飛ぶ鳥も落す勢で、洋画界では勿論第一人者を以て自他共に許し、又た国画界でも大変な高位にあると自任し、……（中略）……苟くも中国画壇では第一人者であることを⁽¹⁴⁾を到る処に主張してゐた。

須磨は、徐悲鴻のことを政界の要人とつながりをもつ、野心的な画家とみていた。中国勤務の始めの頃に齊白石の作品に感動して中国画壇と交流をもつようになった須磨にとって、徐悲鴻との交際は単に画家とコレクターの関係であるというよりも、徐の背後に交渉相手の汪兆銘や朱家驊がひかえる代理人的な存在とみなしていたのかもしれない。

1934年は、須磨にとって6月に蔵本書記生失踪事

件が起こり、自らの30数年におよぶ外交官生活のなかでも「唯一の驚くべき意外」という大きな危機にあった年である。⁽¹⁵⁾ 須磨の部下にあたる書記生が失踪したことに対して、日本側が中国による拉致を主張し、艦船まで用意したにもかかわらず、結局書記生は明孝陵で発見され、個人的問題による失踪であったことが明らかになった。沸騰した日中世論のなかで、当時行政院長兼外交部長であった汪兆銘や外交部次長の唐有壬らが交渉の窓口となり、事態は沈静化した。1935年に暗殺された唐有壬と須磨との友情を示すのが、唐の死後に須磨に遺贈された清初の石濤の「黄山図冊」で⁽¹⁶⁾ある。

須磨弥吉郎は、1927年から11年間におよぶ中国赴任中に、数多くの政財界の要人や画家たちと親交を結んだ。それゆえ、そのコレクションは須磨が好んだ墨彩の文人画だけにかぎらない。中国の名士たちと胸襟を開いて交流した友情の証として、手元に残された作品のなかには、同時代の風俗や社会に目を向けた嶺南派や京派の風俗絵画や、徐悲鴻の学生で郁達夫の姪にあたる郁風の「朝陽図」といったプロレタリア・アートばりの油彩画も含まれる。

満州事変をはさんで日中戦争直前までの日中関係の難局を須磨がなんとか切り抜けてきたのは、ひとえに中国政財界、芸術界の人士たちとの交友のおかげであったろう。本稿で確認したのは、当時の日本ではまだ関心が薄かった中国の同時代絵画に須磨が興味を示し、そのコレクションを充実させてゆくなかで、それらが彼らとのリアルタイムな交流の軌跡が刻み込まれた「交友録」になっていることである。

須磨コレクションは、京博須磨コレクションの中国書画、外務省外交史料館にある「須磨ノート」群、そしてマドリッドで収集し、最晩期の1970年に長崎県立美術博物館（現長崎県美術館）に寄贈されたスペイン絵画などを指す。その総体は、須磨弥吉郎という外交官コレクターの人となりを示す「非文字資料」である。今日の細分化された学術領域では捕捉が困難なその全体像は、東洋、西洋美術史や政治史のみならず諸学の広汎な関心のもとで学際的に研究されることによって、はじめて明らかになるであろう。

註

- (1) 須磨弥吉郎は、秋田県土崎（現秋田市）の生まれ。幼少の頃から祖父の影響で書画に親しんだ。1919年、東京帝国大学英文科選科中退、同時に在籍していた中央大学法科を卒業し、外務省入省。27年から37年にかけて中国に在勤、北京公使館二等書記官、広東領事、上海公使館一等書記官、南京総領事を歴任。39年に外務省情報部長を経て、翌年、スペイン特命全権公使として欧州における対連合軍情報機関のトップに、敗戦後は、GHQによりA級戦犯に指定され、公職追放となったが、解除後、1953年と55年に衆議院議員を2期つとめ、外交評論家としても知られた。
- (2) これら3点については、すでに筆者が『中国近代絵画と日本』展図録（京都国立博物館、2012年）にて簡単な紹介を行った。本稿は、これらの作品解説をもとに若干の加筆と修正を加え、収集の経緯に注目して須磨コレクションの特色を明らかにするものである。
- (3) 王震編『徐悲鴻年譜長編』上海画報出版社、2006年、141-142頁。
- (4) 王震編『徐悲鴻文集』上海画報出版社、2005年、214頁（「詩詞鈔十六題《松鶴図》（1929年）」）。
- (5) 須磨弥吉郎「中国現代絵画」瀧口修造ほか編著『現代美術事典』白揚社、1952年、169頁。
- (6) 須磨弥吉郎著、西上実整理「須磨ノート「京滬洋画派」のうち「洋画派 第二、徐悲鴻（ハ）II、動物（3）松鶴（IV二二四）」の項、『中国近代絵画と日本』展図録、京都国立博物館、2012年、350-351頁。
- (7) JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B08061013600、「不確実及無担保債権整理方交渉関係雑件 松本記録／不確実及無担保債権整理方交渉関係雑件 対交通部各借款関係 第一巻（B-E-1-6-0-J5_1_001）（外務省外交史料館）」。
- (8) 「いよいよ好転 対支債権整理交渉 電信借款整理も成功」『東京日日新聞』1934年12月6日付と、「対支債権 解決の曙光 西原借款の一部 整理案愈々成立」『中外商業新報』1934年12月6日付。
- (9) 前掲、『中外商業新報』1934年12月6日付。
- (10) 『須磨弥吉郎画集』三彩社、1961年と、『とき（須磨日記）』とき編集会、1964年。
- (11) これら遊印二方について、誰がどのような経緯で捺したのかは、現時点で不明である。「樊山手書」は清末民初の詩人・樊増祥（1846-1931）の印文で、「撫孤松而盤桓」は陶淵明の「帰去来兮辞」の一節である。
- (12) 前掲、須磨ノート「京滬洋画派」のうち「洋画派 第二、徐悲鴻（ハ）II、動物（2）駿馬素描（IV一九九）」の項、350頁。
- (13) 「萬先」なる人物について、須磨が軸裏に記した墨書は譚萬先（冕階）であると伝える。須磨は、本図を孫文の側近で国民党主席をつとめた譚延闓（1880-1930）の甥で善徳堂主人の譚開先から入手した。

- (14) 前掲、須磨ノート「京滬洋画派」のうち「洋画派 第二、徐悲鴻」の項、350頁。
- (15) 須磨弥吉郎「蔵本失踪」、前掲『とき（須磨日記）』、84頁。
- (16) 拙稿「辛亥革命と京都国立博物館の中国絵画：上野コレクションと須磨コレクションについて」『美術フォーラム 21』26号、2012年11月、44-45頁。

須磨コレクション関連主要参考文献

- 西上実「須磨弥吉郎と中国近代絵画」『美術フォーラム 21』4号、2001年6月。
- 須磨弥吉郎記述、西上実編「須磨ノート：中国近代絵画編 1-3」『学 叢』25-27号、2003年5月-2005年5月（『中国近代絵画と日本』展図録に再録）。
- 『よみがえる須磨コレクション：スペイン美術の500年』展図録、長崎県美術館、2005年。
- 原口邦紘「外務省外交史料館所蔵「須磨弥吉郎関係文書」について」『外交史料館報』23号、2009年12月。
- 西上実「須磨コレクションの形成と記録性」『中国近代絵画研究者国際交流集会論文集』京都国立博物館、2010年3月。
- 川瀬佑介「須磨弥吉郎のエル・グレコ論と彼のコレクション：著書『スペイン芸術精神史』を中心に読み解く」『長崎県美術館研究紀要』4号、長崎県美術館、2011年3月。
- 呉孟晋「ある外交官が見た中国近代絵画：須磨弥吉郎の東西美術批評を手がかりに」『アジア遊学』146号、2011年10月。
- 『中国近代絵画と日本』展図録、京都国立博物館、2012年。
- 呉孟晋「辛亥革命と京都国立博物館の中国絵画：上野コレクションと須磨コレクションについて」『美術フォーラム 21』26号、2012年11月。